
転生【恋姫＋無双】演義

李文達

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生【恋姫†無双】演義

【Nコード】

N3084H

【作者名】

李文達

【あらすじ】

死んだはずの人間が目を覚ましたら、何故か三國志の世界にいた。不安と期待を胸に新たな世界を進む一人の人間の物語。

只今全編改定中……しばらくしたら一気に掲載します

序編第巻話 目を覚ましたら（前書き）

はじめまして

初めて小説を書かせていただきます

感想批判等を貰えたら幸いですm（　　）m

話は三国志（正史、演義ごっちゃ）を中心の予定でしたが早速ずれ始めています

恋姫無双（真・恋姫無双）のキャラクターは出てきますがシナリオはかなり変わるかもしれません。

オリキャラも数名（以上かも）出てくる予定です

序編第壹話 目を覚ましたら

「危ない！」

それが【俺】が聞いた最後の言葉だった。直後に物凄い衝撃を受けた。そして何も分からないまま、俺の意識は徐々に闇に支配されていった。

（ああ……俺はこのまま死ぬんだな……）

不思議と恐怖は無かった。ただ、ここまで冷静にいられた自分が不思議だった。いつしか自分の意識は闇に吸い込まれていた。

次に目が覚めた時はどこかの部屋の中であつた。

（あれ？死んでない？確かに死んだはずだと……）

あの時、確実に自分は死んだ……はずだ。自分の体の事は自分が一番良く知っている。だから断言も出来る。俺は死んだ！と。

（でも……実際に生きてるんだよな……まあ、儲けもんだとしとくかで、ここ何処だ？）

生き死にの事はとりあえず置いておいて、状況の確認。今はベッドの上だから視界に入るのは天井のみ。それだけでも分かった事がある。

此処、多分病院じゃねえ。

天井が木製なのはまだ良いとして、電球がないのはおかしい。よほどの山奥だったら……いや、日本だったら電気はさすがに流れてるな。

つまり……日本かどうか怪しいと……まあ、死んでるなら地獄か天獄という所だな。

落ち着いて考えがまとまった所で、ベッドから体を起こす。

（痛くねえ？）

おかしい、あれだけの衝撃を受けたのだ、生きているとしたら激痛が走るはず。それが無いって事はやっぱり俺は死んでるんだろう。

（しょうがねえか、まあそんなに大層な人生でも無かったし、運が無かったと思おうか）

右手で頭をガシガシ掻く。これは俺の癖の一つらしい。呆れている時は右手で、怒っている時は左手で頭を掻くらしい……とは友人の言。

と、そんな事は置いといて……

まあ、とりあえずいつものように頭を掻いた訳だが……何か手が小さくねえ？力もあまり入らねえみたいだし。

鏡かなんかねえかな？と、周りを見てみても鏡は見あたらなかった。あるのは筆筒、椅子、机くらいだ。

うゝむ、これは困った。これからどうするべきかわからんぞ。ここがどこかも分からずに動くのは拙いだろうし……

まあ、そろそろ朝飯の時間だからその後を考えるか。

いや、ちよつと待て、俺。なんで朝飯の時間だと分かる。だいたい此処がどこかかも……………あれ？わかる。何故か頭の中に入っている。何故だ？

とりあえず深呼吸して落ち着いて、改めて冷静になって記憶の中を探ると……………おゝおゝ、出てくる出てくる。この【時代】の記憶が山のように。

まず分かった事は此処が中国の江夏である事、今が後漢、つまりは三國志の前の時代だという事。ついこの前に熹平から光和に改元された事。そして、俺の今の名前。

今の俺は李通、字は文達。魏に仕え、その武勇は随一と言われた名将。なのに演義では名も無き雑魚として描かれた可哀相な人。

何か言つて虚しくなってきた。今は自分の事だし……………ちなみに年は数えて11、つまりは満10歳だった。だったらまだ字は無い筈なのだが（普通は成人する時につける）どういう訳か既に【文達】と字がついていた。

何故記憶が二つあるのかは分からないが、とりあえず現状は確認した。としたらする事は一つ。朝飯だ！

序編第貳話 一人目の仲間（前書き）

今回からオリキャラ（実在はしました）が出てきます

恋姫無双のキャラが出るのもう少し先になります

序編第貳話 一人目の仲間

朝飯を食べ終えた俺は、そのまま部屋に戻った。すぐに遊びに出ると思っていたらしく、母親には珍しがられたが、今は先の事を考える方が先決だった。

とりあえず筆筒から羊皮紙を取り出し、机に向かった。今が光和元年だとしたら西暦にしたら178年。黄巾の乱が始まるのが184年だから、あと6年か……

羊皮紙の上をサラサラと筆が走る。そこに記される文字はもちろん中国語。しかも大学で習った字と違い古語。それを読めるのだからやはり自分は李通として生きてるのだろう。

筆が止まる。羊皮紙の上にはこれから五年間の行動予定表。李通という人物は黄巾の乱で名を挙げた。そして曹操の配下となり42歳で病死。もちろんそれを完全になぞるつもりはないが、黄巾の乱まではなぞろうと考えていた。

こうすれば歴史は変わるかも知れないが、こんな小さな事で大局は揺れないだろうし、もし変わってもそれは後世には大きな影響はない。あるとすれば、中世の朝廷が少し長くなるか短くなるくらいだ。

それに、歴史に縛られて生きたくはない。俺は今を生きている。二度目の人生かもしれないが、生きているのは確かな事。だったら思うように生きたいではないか。

とりあえず今後の事はこれで良し。まさか大学で習った知識が、こ

のような形で生かされようとは思ってもよらなかったが……

さて、次は自分の事だ。いくらなんでも冷静すぎる。死んだ事をあつさり受け入れたのを始め、こんな転生まがいの事になってるのに、またあつさり受け入れ未来の予定表を作り上げる始末。自分の事なのだが、どう見てもおかしい。まるでこうなるのが運命みたいに受け入れている。

運命か……もし本当にこうなるのが運命なら今はまあいいとしよう。二度目の人生を与えてくれたのだから。だが、これからは運命など知るか！俺の人生は俺で決める。運命など吹き飛ばしてやる。

「万億、今日は遊びに行かないのか？」

机に向かって運命と決別する決意をしていると、窓から少年の声が聞こえてきた。振り向かなくてもわかる。悪友が誘いに來たのだ。

「今から行くぞ、公衛。その前に幼名で呼ぶのは止める」

窓を見ると一人のガキ大将みたいな少年が縁に腰掛けていた。少年の名は姓を陳、諱を恭、字は公衛と言った。隣の村に住み、良くこの街に遊びに來ていた。

「はは、悪いな文達。けど、約束を破りそうになったお前が悪い！」

陳恭は縁に座ったまま、鞘に収まった剣をビシリと突き付けてきた。顔は若干不満そうだが。約束を忘れてるのが不満なのだろう。

約束？片方の記憶を一生懸命に探す。ああ、そうか今日は決着の日だったか。二つの記憶というのも厄介なものだな。

「いや、悪いな、ちよつと考える事があつてな。とりあえず何人位集まつたか？」

箆笥から一振りの剣と、刃を潰してある短槍を二本取り出しながら陳恭に聞く。向こうの勢力を考えると20人は欲しい所だが……

「駄目だ、みんな怖がつちまつて10人しか集まらなかった」

陳恭は忌々しそうに吐き捨てた。まあ、無理強いはしないと決めたのは俺達だからしょうがない。

「無理強いしないと決めたのは俺達だろ？10人集まつただけ良かったと思おう。それに策の方は上々なんだろ？」

俺はニヤリとした笑いを陳恭に向けた。陳恭も同じようにニヤリとした笑いを返してくる。どうやら上手くいっているようだ。

「なら大丈夫だ。この勝負は俺達の勝ちだ。さあ、勝戦に向かうか」

その言葉と同時に陳恭は窓から飛び降りた。続いて俺も窓から飛び降りる。さあ、出陣だ。

陳恭と二人で向かった場所は街の郊外の草原。そこには10人程の少年達がいた。皆、手には木の棒を握っていた。

「そろそろ隣街の奴らがやってくる。その数は40だ」

皆の所が集まると、陳恭は皆に向かって話した。仲間の少年達はその言葉に息を呑んだ。12対40、数だけ見れば圧倒的に不利である。

「しかし、奴らはこの街でやってはならない事をした、美明ちゃんに声を掛けた！」

その言葉に周りの少年も大きく頷いた。

心なしか陳恭の言葉も強かった気が……そう、陳恭との約束とは隣街の少年との抗争の助っ人。しかも理由が一人の女の子だというからあまりにも情けない気もする。が、勝負事には負けたくないから確実に勝つように策を練った。ちなみに美明ちゃんというのは街一番の美少女らしい。あまり興味がないから知らないが。

「こっちには俺もいる、文達も手伝ってくれる、策も完成している、負ける事はない！」

陳恭の声はどんどん大きくなっていく。それに比例して少年達の土気も上がっていく。どうやら陳恭は将としての資質があるな。戦い前の鼓舞の有無、成否でかなり違うからな。できれば今後一緒についてきて貰いたいものだ。

「では皆持ち場に散れ！次集まる時は勝利の後だ！」

陳恭の最後の言葉と共に、少年達は半分に分れ左右に散った。俺達二人はこのまま待機して相手を待ち受けた。約束の時間までは残り二刻。

「ところで公衛、これに対する報酬はどうなってるんだ？」

待っている間、陳恭に対しおもむろに尋ねてみた。今までもこういう事は何回もあったのだが、その度に誤魔化されていた。そしてそのまま笑い話になる。つまりはお約束というものだな。

「あゝうん、それはまた今度な」

そしてこれもいつもと同じ返答。だが今回はお約束なんかではなく、本気であった。

「俺はあと少ししたら旅に出ようと思う。お前が良かったらだが、ついて来ないか？」

この時代を早く終わらせる。それが今の俺の願い。この時代は希有と言って良いほど戦いが激しい時代なのだ。それこそ人口が半減以上する程の。だからこそ、早く止めたい。今の俺にはこの時代の記憶があるから尚更その想いは強くなっていた。

しかし、このままじゃ足りない。力も知恵も仲間も……だから旅に出る。陳恭には付いてきて欲しかった。一人目の仲間として……

「理由は？それを聞かないと返事はできないぞ」

鋭い目つきで陳恭は俺を見つめながら、旅の理由を求めてきた。さつきまでとは全く違う表情で。僅か10歳の少年が出来る顔では無

い、大人の顔だった。

「この頃賊がまた激しく暴れ出したる？多分、数年後には全土で大きな乱が起きると思う。だから今のうちに力をつけたい。それに知恵もな。後は仲間集めかな？」

嘘はつけなかった。いや親友にはつきたくなかった。もう一つの記憶かもしれないが、確かに陳恭は親友だったから。

「よし、わかった。ついて行ってやるよ。というか俺も旅に出るつもりだったからな」

………は？旅に出る？陳恭も？

「いやな、家がつるさいんだよ、もう少し跡取りらしく勉強しろつてよ。しかも弟に家を継がせたいって考える奴もいてな。だったら俺が家出れば万々歳だろ？弟は真面目なやつだから立派に家を継ぐだろうしょ」

あつけらかと陳恭は言った。が、そんなに簡単に話せる事ではないと思う。陳恭の家は村一番の実力者だ。多分裏でいろいろ有った筈だ。大人びているのも納得した。ちなみに俺の家は街で三番目が四番目らしい。

「まあ、目的は無いより有った方がいいしな。ちょうどいいから便乗させてもらうぜ。ついでに報酬も払えたし一石二鳥だぜ」

よっしゃと小さく拳を握り締めて陳恭は喜んだ。拙いな、ちょっとミスったかも。内心でため息をついた。

ただ、陳恭が付いてきてくれるのはありがたかった。頭は切れるし統率力もある。そして交渉がうまかった。俺達が持つてる剣も陳恭が鍛冶屋に交渉して作ってくれた物だ。今後、軍を持つとしたら交渉は大きな武器となる。

「今後の事も決まったし、そろそろお客さんも来る頃だ。俺達はこの街最後の戦いだ。確実に勝とうぜ」

俺は陳恭の言葉に頷いた。思考を切り替えて敵を待つ。俺の名は李文達、こんな所で負ける訳にはいかねえんだよ。

序編第貳話 一人目の仲間（後書き）

後書きの代わりにオリキャラの説明です

李通 字は文達

正史では魏随一の勇将、演義では馬超に一瞬で切られる雑魚とギャップの激しい人物。

今作では転生した主人公として頑張っていく事になるでしょう。

馬超に殺される気も病死する気も更々ないようです。しかも思い切り歴史変節を宣言しています

陳恭 字は公衛（創作）

李通の盟友で共に拳兵する順調に勢力を拡大するが、弟に乗っ取りを図られて暗殺される。

としか正史、演義共に記述がない為、ほとんどが創作となるキャラです

汝南編第壱話 朗陵至りて

「よし今だ、銅鑼を鳴らせ！右翼、左翼突撃と共に我らも轉身、逆襲するぞ！」

「……応……！」

俺の掛け声に周りの奴らが応じた。策とはいえ今まで相手に好き勝手やられていたのだ、鬱憤が溜まっているはずだ。こういう時は指示を出さず兵に任せる。なるべく殺すなどの指示は出さなくても大丈夫そうだ。伊達に半年も共に戦ってない。

あれから6年……おれは17歳となっていた。一月前に故郷に戻った俺と公衛を待っていたのは黄巾の乱勃発の報だった。五年に渡る武者修行（この言葉を公衛はいたく気に入った）の末、俺達は立派な若武者となり戻ってきた。

しかもただ戻ってくるだけではなく、最後に寄った襄陽から片っ端から山賊、河賊等を討伐して組み込んでいった為、江夏の故郷にいた頃には千を超える軍勢となっていた。おかげで、黄巾の乱の報を聞いた時にすぐに拳兵が出来た。江夏からの義勇兵も組み込み、約千五百の軍勢となった俺達は北進してここ、汝南郡朗陵に至った。

そこで問題が起きた。

ここ朗陵には勢力を持っていた周直という人物がいた。ちなみに県令は黄巾の乱が起きたら、すたこらさつさと逃げたらしい。全く、県令が最初に逃げるってどういう事だよ。

まあとにかく、俺達はこのに留まる事が目的では無いため、黄巾軍

を倒したらさつさと抜けようとした。もちろん周直には挨拶の手紙と、僅かながらだが通行料として金子を送った。そしてそのまま抜けようとした所、背後から周直の軍が襲ってきた。

用心として殿に俺が居たのが幸を奏した。まさかの襲撃に動揺した軍を纏めあげると、俺は単騎で駆け回り周直軍を追い払った。周直軍は追い払ったものの、また背を向けて抜けようすると襲ってくるのは確実で、仕方なくここで迎え撃つ事になった。

半刻前……

「さて、どうする？こつちとしてはただ抜ければ良かったんだが……」

俺は右手で頭を掻きながら、目の前の二人を見た。一人はもちろん公衛、そしてもう一人をは眼鏡をかけた少女だった。

この少女、姓を趙、名を儼、字を伯然と言った。予州の出身だが、黄巾の乱が激しいため、妹分の杜襲を連れて避難民と共に南の方へ逃れて来たらしい。その途中、黄巾軍に襲われそうになる所に俺達がちょうど駆け付け保護。避難民は護衛をつけて江夏に向かってもらった。

趙儼と杜襲はこのまま俺の軍に残り共に戦ってくれと言ってくれた。これには俺も公衛も驚いた。女の子なんだから無理について来なくていいと言ったのだが、二人とも計算能力や政治学には自信があり、趙儼は軍略にも詳しいと言い張り、仕方なく共に来る許可を出した。

それから二人が軍に馴染むのは早かった。元々義勇軍としては驚く程しっかり統率されていたが、二人が来てからは更に磨きがかかった。杜襲は兵糧や武具の管理を任せると、すぐに把握して問題点を提示、分配して兵のみんなに喜ばれた。更には食事の質も改善されたので兵達は皆（もちろん俺達も）杜襲に感謝した。

趙儼は軍法の取り締まりを公衛と共に任せた。すると、厳しいながらも温情のある裁きで皆から尊敬を集めた。兵を率いてもそつなくこなし、李通軍の第三将として皆に認められた。しかし、何よりも皆に受けたのはその容姿。可愛い少女がすぐ側にいるのだ。しかも、将としても優秀なのだ。否が応でも士気は上がった。

だがなあ……あの趙儼と杜襲……俺の【知識】の中では男で魏の名政治家なんだが、性別転換にはもう慣れたがまさかこんな所で出会うとは。まあ有能な人間だから問題はないんだけど。ああ水鏡女学院での思い出が蘇る……

閑話休題

「どうするもこうも、戦うしかないんだろう？ だったらなるべく被害を少なくしないとな」

公衛が不満そうに言った。実際俺も大分不満だ。なんで関係ない所で戦わなきゃならん。敵は黄巾党だろう。

「しかし、向こうの兵力はこちらの倍はあります。そう簡単には生きません」

あまり感情を表に出さない李佳——趙儼の真名である——も厳しい顔をしている。やはりこの戦いに不満なのだらう。

「で、李佳。なんか策はあるのか？俺にもあるっちゃあるが下策に近い」

「あるにはありますが……多分公兄様と一緒にだと思いますよ。半数がここで引きつけて、残りの半数が左右から突撃包围……ですよね？」

溜め息混じりに尋ねた公衛に李佳が同じく溜め息で返した。それを聞いた公衛がまた溜め息を吐く。どうやら同じだったらしい。この二人共にいる時間が長いので、どうやら息が合うらしい。二人の溜め息が重なる事重なる事。

「それで、文兄様のお考えは？」

溜め息をつくことに飽きたのか、李佳は俺に話を振ってきた。公衛も同じようにこっちを見ている。本当に息が合うな、お前達。

「まあ、そんなに李佳や公衛の考えと変わらないな」

その言葉に二人共肩を落とす。まあ、解らなくはないがそう落ち込まないで欲しい。「そんなに変わらない」改良してある「って事なんだからさ。

実際、李佳達の策は悪くはない。多分、曹操や周瑜、諸葛亮ならこの策を取るだらう。だが、俺達には下策である。なぜなら「四倍の差を支えきれぬ武力の持ち主が居ない」からだ。

曹操の元には夏侯惇や許褚が、周瑜の元には甘寧や周泰が、諸葛亮の元には関羽、張飛等々。対してこっちは俺、公衛、李佳の三人。俺も公衛もそこらにいる武将には負けるつもりはないが、猛将までは行けず勇将止まりだった。

数字で表すとするならば100点満点で、正史では魏随一と言われた筈の俺が良くて85、公衛が75、李佳に至っては50あるかないかだろう。おそらく90以上はあると思われる猛将の皆様には適いません、多分。

もちろん兵の練度等は引けを取る気はないが、戦場を支配する武力というものはそれらを一蹴する爆発力がある。特にこういう場面では大いに必要になってくる。

だからと言って、基本的に間違っていない策を棄てる訳にはいかない。武力が足りないなら作戦で、統率力で補えば問題はないはずだ。そしてその改良策にはもう一人必要だった。

「ちよつと杏を読んできてくれないか？」

「文兄さん、杏の事呼んだ？」

兵士と呼ばれて天幕に入ってきたのは長い漆黒の髪を後ろで一つに纏めた小学生くらいの可愛い少女だった。少女の名前は杜襲、字を

子緒、真名は杏。李佳と共に仲間になった少女である。

「ああ、呼んだ。ちょっと頼みたい事があるからこっちに来てくれないか？」

俺がそう言つて手招きすると、杏は嬉しそうに顔を綻ばしトコトコと歩いて俺の膝の間に収まった。杏はどうやら甘えん坊らしく、共に来る事になった日から俺の膝の上が指定席となっていた。寝れないからといって俺の天幕に潜ってくるのも日常茶飯事である。最初はかなり慌てたが、何回も繰り返すと焦る方が馬鹿らしくなり、今では一緒に寝ている。

俺の名誉の為に言っておくが、俺は断じてロリコンではない。それに、起き抜けの顔であんな優しく暖かい笑顔を見せられたら誰だつて墮ちる。もう一度言っておく、俺は断じてロリコンではない。

「文兄様？もしかして杏を戦場に出すおつもりですか？」

李佳が俺を睨みつけながら聞いてくる。口調も若干いつもよりきつい。どうやら杏を戦場に出すのに反対らしい。やはり妹が心配なんだろうな。

「えっ、とうとう杏を戦場に連れてってくれるの？」

そんな姉の心配を知つてか知らずか、李杏は嬉しそうに声を上げた。今まで戦場に出たいと何回も泣きつかれた。それを公衛と李佳で止めていたのだ。それがあある夜は俺がいつも以上に杏の抱き枕化するの二人には内緒だ。

「いや、何時も通り戦場に出るのは俺達三人だ。」

その言葉に杏は寂しそうに、顔を俯かせた。李佳はほっと胸をなで下ろした。その時に小さく「また一人でお留守番か」と杏が呟いたのを聞き逃さなかった。俺は杏の頭を撫でながら、言葉が続けようとしたが、何故か李佳の視線が先ほどより強くなったのでつい止めてしまった。

……ああ、なるほど。李佳の視線を追って気づいた。李佳の視線は俺の手、杏の頭を撫でている手に向けられていた。俺は公衛に向かってニヤリと笑うと向こうも同じ顔を返してくれた。そして音も無く立ち上がると、俺（の手）を凝視していた李佳を持ち上げて膝の上に乗せた。

その際李佳は小さく悲鳴を上げたが、公衛の意図に気付くとその胸に頭を預けた。李佳はどっちかと言ったら俺よりも公衛に懐いてたからな、と勝手に納得した。

そのまま四半刻程天幕の中は無言だった。後から聞いた所、外にいた兵士達是不審に思ったが、覗きたくとも覗けない状態だったらしい。正直悪かったと思う。

「それで、杏には何をしてもらった？」

そんな無言の中、公衛が俺に質問してきた。いかんいかん、今は軍議の最中だった。

「ああ、兵200を連れて朗陵の街に行ってもらう。兵糧を街に配ってもらい、全門を閉めてもらおうかと」

これに公衛と李佳は縦に首を振る。今は向こうも街の外に陣を敷いているが、街の中に逃げられると面倒くさい事になる。兵糧は姑息な事かもしれないが人気取りだ。背後から襲って来る所を見ると無いと思うが、もし街の人達に人気があつた場合こちらが悪役になる可能性がある。その為に先手を打っておく。

「それで他はどうするの？」

李佳が砕けた口調で聞いてきた。何時もの丁寧な口調ではない。李佳は公私混同はしないのだが、さっきのせいでどうやら混ざってしまったようである。

「俺は600を率いて中央、李佳、公衛の二人は左右に600ずつ展開。後は二人の案と一緒にだな。」

「「なっ!?!」」

二人が驚くのも訳ない。二人の案よりもさらに少ない人数で、引きつけようとしてるのだから。

「文兄様、死ぬ気ですか!？」

ああ、李佳の口調が元に戻ってる。李佳の砕けた口調は貴重なのに……

「文兄様、聞いてるんですか!？」

余計な事を考えながら杏の頭を撫でていると、更に李佳から怒鳴られた。杏は頭を撫でられるがままになっている。

「公兄様もなんか言ってください!」

「なるほど、そういう事か……」

李佳は公衛に助けを求めたが、公衛はどうやら納得したようだ。というかお前が解らなかったらおかしいだろ。

「となると、見回りが必要だな。作戦開始は……暮れ始める三刻ぐらい後か？」

「出来れば陽動をかけたい所だが、下手に刺激してもまずい、斥候を放つぐらいで良いだろう。公衛、準備を頼めるか？」

「おう、見回りと斥候は任せた」

あゝだこゝだ、俺と公衛は議論を重ねる。銅鑼を鳴らす頃合、回り込む位置等等。それについて行けない李佳がとうとうキレた。

「いい加減に私にも教えてください!!」

こうして作戦は決まった訳だが、結果から先に言おう。俺達は圧勝した。周直軍は周直や幹部を始めとして500人以上が死亡、それとほぼ同数が敗走、他は全員降伏した。対するこちらの被害は死者が16、重傷者27という少なさ。いかに圧勝したかがわかる証拠だった。

戦いの経緯はこうだ。まずは俺が単騎で挑発、それに乗った周直軍は一斉に中央の部隊に襲いかかってきた。俺は周りを指揮しながら陣頭に立ち、二本の短槍を奮って群がる兵を薙ぎ倒す。皆も奮戦するが数の差は覆せず、じりじりとしかし整然と後退する。周直軍はそれを見ると勢いと数に任せて押し出してきた。それが仇になった。

俺達の後退した場所の左右は半里に続く濠というか落とし穴になっていた。夕暮れ時で見えにくくなった上、勢いのままに進んだ為に全く気づかなかったようだ。さらに後ろから押されるので止まる事が出来ずに、前に居た兵達は次々と穴のなかに落ちていく。まあ、そんなに深くないから死にはしないと思うけど。そして冒頭に至るのである。

「しかし、ここまで上手く行くとはな」

朗陵の街へと向かう道で公衛は呆れるように呟いた。あまりにも呆気ない、そういう事なのだろう。数に飽かせて攻めるだけ、本当にただの賊と変わらなかった。

「ところで……なんで公兄様はこの策がわかったのですか？」

「そりゃまあ、昔使った策だからな。解らない方がおかしいだろ？」

公衛に並んで馬に跨る李佳が放った疑問に、苦笑いしながら公衛は答える。そう、この策は江夏の街を出て旅に出ると決めた、あの戦い（と言うのもなんだが）の時に使った策なのだ。兵数違いなど状況はほとんど変わらず、もっと早く気づいてもおかしくはなかったんだが。

そんな話をしながら朗陵の街へと向かっていると、前の方から杏が向かって来た。

「あ、居た居た、文兄さん、公兄さん、李佳姉〜！早く早く〜！」

大きく手を振りながら叫んでいる。何かあったのだろうか。指揮官級の人間に降伏兵の監視と野営の準備を命令し、公衛と李佳と共に馬を走らせた。

なにやら興奮している杏に連れられて、街の中に入ってみると大歓声に迎えられた。いきなりの事に頭がついていかない。公衛も李佳も茫然とした顔をしている。とりあえず、事情を把握している（だろう）杏に話を聞いてみる事にした。

杏も興奮していて要領を見なかったが、要約するところなる。

『賊とあまり変わらない周直が勢力を持てたのは県令が居なかったせいである。そこで俺に県令としてこの街に赴任して欲しい』
との事らしい。杏はもちろん自分達が黄巾賊の討伐に来て、この街に留まるつもりはない事は説明したらしい。それでもどうしてもと言って聞かないらしい。そこで皆と話して決めさせて欲しいと答えたとの事。

さて、どうしよう……今のところ黄巾賊はもっと北にいる。だとしたらこんな所で留まる必要はない。しかし、すぐにここ汝南にも及ぶだろう。だったらここら辺りに拠点を持つのも悪くない。どちらの間違いいではないように思えるし、ここは皆の意見を聞くべきだろう。

「三人はどう思う？」

「そうだな、兵数も増えたしそろそろ腰を落ち着けても良い気がするな」

「私も公兄様と同じですね」

「杏もしばらくこの街に居たいよ」

見事に三人一致だった。そうと決まれば善は急げだ。代表の所に行くとするか。ところで……

「なんで俺なの？」

何故か俺が名指しで指名を受けていた。公衛や李佳もいるのになんで……

「そりゃお前が一番適役だからだろう？それに俺は堅苦しい事は苦手だしな」

「私も文兄様が一番良いと思います。公兄様だと怠けてしまいそうですし、私じゃ威厳が足りません」

すかさず公衛と李佳が説明してきた。その説明が理に叶っていたので、反論は出来なかった。がっくりと肩を落とすと肩を叩かれた。

「文兄さん頑張つてね」

杏に笑顔で言われて、乾いた苦笑いしか出来なかった。

その日、朗陵の街に新たな県令が誕生した。

汝南編第壱話 朗陵至りて（後書き）

オリキャラ紹介

趙儼 字は伯然 真名は李佳

正史では朗陵県長から参軍などの様々な役職を歴任し最終的には司空にまで至った魏の名将、名政治家

李通と仲が良かった為この作品にも登場する事に……

本作では眼鏡をかけた冷静な少女として登場

杜襲 字は子緒 真名は杏

正史では祭酒や侍中を務めた政治家で曹真や司馬懿の軍師としても活躍した

若い頃は趙儼と共に荊州に避難していた為、趙儼繋がりで登場

本作では甘えん坊な少女として登場、李通が大好きな様子

汝南編第貳話 前県令の置き土産

「ふう……こんなもんか」

手に持った筆を置き、机の上の竹簡を巻いた。今日の政務はとりあえず一段落である。椅子から立ち上がり身体を伸ばす。うーん、二刻近くも座ったままだと所々痛い。時刻は正午過ぎ、昼飯でも食べに行くかな。

俺が朗陵の県令となつてから一週間、なんとか政務にも慣れ余裕も若干ながら出てきた。

最初の頃は前の県令の残した仕事も大量にあつた為、俺、公衛、李佳、杏の四人がかりで仕事に取りかかる事になった。

この時に李佳と杏の本当の実力を見る事になるのだが……すまない、二人の事正直舐めてた。まさかあそこまで凄まじいとは……

速さはもちろん内容も素晴らしいの一言。俺の提案した屯田制もすぐに内容を理解した上で、民屯軍屯の違いと問題点にまで指摘してきた。うん、そこまで理解出来るとは思ってたよ。確か屯田制ってあと十数年後だよ……まあそれはいいか。

ちなみに降伏した周直軍の兵達には屯田兵になつてもらつた。汝南郡は元々肥沃な土地だから十分収穫は期待出来るし、なにより正規の軍として雇える資金がない。

俺達義勇軍が持っていた資金では到底足りないし、街の資金は開墾や商業の発展に使う分しかない。周直が集めていた資金兵糧は街の人達に返しちゃったしな。まあ、半分は寄付として戻って来たんだけど……

そのため周直軍の皆様は屯田兵になってもらう他になかった。元々農民だった人が多かったみたいで、混乱は全くと良いほど起こらなかったのが救いだろうか。

ついでに治安維持の為に警備隊を設置し、隊長を王珪と言う人物にお願いした。この王珪という人物、周直に屈さず常に街を警邏し治安維持に努めた強者であった。試しに手合わせしたみたが危うく一本取られる所だった。もちろん街の人物からも信頼が厚く、野盗みたいな髭面の外見からは想像もつかない気配りの利く人物だった。

いろいろとあったが軍の再編や警備隊の設置も終わり、李佳や杏の働きもあり残されていた仕事は一週間で片付ける事が出来た。

そう、【残されていた仕事】はである。

俺が県令になってからの仕事には一切手が付いていなかった。まあ、残されていた仕事よりはかなり少ないし、急ぎの書類もないみたいなので少しずつ処理していこうと皆と決めた。

とりあえず今日の分の仕事は終わったので、警邏も兼ねて街に出る事にした。城で食べても良いんだけど、街の皆と食べる方が楽しいんだよな。それに、皆の意見を直接聞けるし。

服を着替えて剣を下げ、扉に手をかけようかという時に扉が開いた。俺の顔面に向かって……

「文兄様、ちょっと見てほしい物があるのですが……文兄様どうかしましたか？」

思いつ切り鼻に当たったんだよ、李佳。君の開けた扉がさ。

うずくまる俺を不思議そうに見る李佳に心の中で文句を言いつつ立ち直る。が、何もしないのも非常に癪なんで、いきなり李佳の頬を両手で引っ張ってやった。

「ひゃ、ひゃにしゅりゅんでひゅか!？」

お、思った以上に柔らかい。意外と気持ちいいな、これ。それに目に涙を溜めながらの上目遣い。うむ、眼福眼福。

「ううう……」

そんな俺に何か感づいたのか、涙目で李佳が睨み付けてきた。が、全く怖くないし、逆に嗜虐心がそそられる光景だ。あ、もちろん俺にそんな趣味はないぞ。俺は至って正常だからな。まあ、後で説教に時間を取られるのも困る。そろそろが頃合だろう。

「全くいきなり何をするんですか!？」

俺の攻めから解放された李佳が改めて睨み付けてくる。涙目で少し赤くなった頬を撫でながら睨むその姿は全く怖くなく、逆に嘖き出しそうになる。もちろん表情には出さないが。

「では、次から扉を開ける時は人が居ないか確認するように。それで、その書類が見て欲しい物？」

俺の言葉で何があつたのか気付いた李佳はばつの悪そうな顔をする。そんな事はもちろん気にせず、俺は李佳の手にあつた書類を奪い取る。

そして後悔した。その書類を見たことに。李佳をからかった天罰かと思う程にその衝撃は強かった。

「なあ李佳……これって見なかった事に「なりませんね」……だよな」

李佳は俺に最後まで言わせずに、却下する。その言葉に溜め息が混ざっているのは決して気のせいではないだろう。だって俺も溜め息つきたいし……はぁ……

詳しく聞いてみると、その書類は李佳の政務室の隠れ引き出しの中に入っていたらしい。他にも色々入っていたらしいのだが、さほど問題のある書類はなかったらしい……これ以外は。問題の書類……ぶっちゃければ徐州のとある豪族からの借用書だが、ご丁寧にも朗陵県令の印が捺されており、見事にこの朗陵県の借金となっていた。しかもその額は莫大で、今の県の全資産の半分以上である。とてもじゃないが払える金額では無い。

頭を急速に回転させるが……駄目だ、何も思い付かん。救いを求めて李佳に視線を向けるが、冷や汗をかくその顔を見て同じだと悟る。ああ、頭が痛い……

「はぁ、ここで悩んでもしょうがない。李佳、昼飯は食べたか？」

「え、あ、まだですが……」

俺の言葉に李佳は悩んでいた顔を上げる。その表情は暗い……多分俺も同じような物だろうが。

「じゃ、一緒に食いに行くか。今日は何でも奢ってやる」

こうなったら気分転換に思い切り食うとしよう。というか、そうじゃないと頭がもたない。そしてそれは李佳にも当てはまるよう……

「ありがとうございます。申し訳有りませんが今日はお言葉に甘えさせて頂きます」

いつもなら遠慮する所を迷わず誘いにのってきた。そうと決まれば話は早い。問題の書類は引き出しにしまい、二人で早速街に繰り出した。

この時、俺は心中である事を決めた。

前県令、会ったら殺す……と。

それから更に数日後……俺は単騎で草原を進んでいた。目的地は徐州臨淮郡の魯家……そう、俺はこれから借金の期限の延長を頼みに行くのだ。

公衛達とも話し合った結果、やはり無視はまずいだろうという結果になった。しかし返せる金はない。無いものは無い。そこで期限の延長を頼みに行く事になった。あわよくば借金の減額も出来れば……というのが内心だが。

という訳で、俺は一人で徐州に向かっている。別に公衛でも良かったというか、交渉事は公衛の方が得意だと思うんだが……「こういうのは文達向きだろ？ 情報足りないし、誠意を見せるのはな」の言葉で満場一致で決定となった。

別に徐州に行くのは（堂々と仕事をサボれるし）不満じゃない。ただ、一人で来たのは後悔している。何故ならば……

「おう、兄ちゃん、身包みおいてけや！」

何度もこんな奴らに絡まれているからな。

汝南編第弐話 前県令の置き土産（後書き）

時間かかった割りに短いです、すいません

王珪は完全なるオリジナルです。多分残りのオリジナルキャラは実在した人物になると思います。（断言できないのが痛い……）

汝南編第参話 徐州への道中 其一（前書き）

大変遅くなりまして申し訳ありません m () m

次回からもう少し更新を早くしたいと思います

汝南編第參話 徐州への道中 其一

「おう、兄ちゃん、身包みおいてけや！」

朗陵を出て四日目、そろそろ盜賊と遭遇するのも飽きた頃、この旅七回目の遭遇となった。しかも遭遇する度に人数が増えていくという、なんとも嫌な連鎖。最初の時は一桁だったから楽に追い払えたけど、さすがに三桁近い盜賊を一人で追い払える程、自分の武を信じている訳じゃなく……しかしそんなに目立つ訳でもないし、金を持っているようには見えないと思うんだけどな……

「おい、聞いてんのか!？」

と、そんな現実逃避をしている間に周りに人間の檻が完成していた。皆それぞれ得物を抜き放ち、やる気満々のようである。まったく俺一人に随分と大仰だな……と深く溜め息をついた。

「何の用ですか皆様？ 俺は金持ってないですし、全然儲かりませんよ？」

さっさと通せと意味を込めて、慇懃に言ってみる。こういう輩には何を言っても無駄だとは昔の旅で思い知らされているが、それでもすぐに武に頼るのは好きではない。

もちろん、甘いとは分かっている。こんな世の中だ、人の死などそこら辺に転がっているし、自分で斬り捨てた命もある。だが、それで救われる命があるのもまた事実。故にそれを間違いだとは思えなかった。

「ふん、そんなのは俺達が決める事だ。お前はさつさと身包みとその馬を置いてどっかいけ」

しかし、いややはりというべきか、予測通りの言葉だった。どうやら見逃してくれる事はないらしい。もし、これで向こうに馬が居なかったらさつさと逃げ出す所なのだが、ある程度の大きさの盗賊団だったのか、数頭の馬が見てとれた。ならばやる事は一つ。鞍につけてあつた二振りの短槍を構えた。

「ん、なんだ？ 兄ちゃんやるって言うんか？」

俺が構えたのを見て取り囲む男達が下卑た笑い声を上げた。一対百客観的に見ても勝ち目など無いに等しい。しかし、俺はそれに――男達だけに聞こえる声で――挑発で返した。

「ああ、お前達など一人で充分だからな。さて……我が名は李通、字は文達！ 汝南が朗陵の県令なり！ 命が惜しい者はさつさと去ね！」

俺の名乗りに盗賊達に動揺が走るのが見て取れた。どうやら周直を倒した事がこころいまで伝わっているようだ。だが、動揺は直ぐに収まり、残ったのは俺に対する敵意殺意のみ。男達は全員こちらを睨み付けている。はあ、これじゃまったく貧乏籤だな。公衛の馬鹿野郎……

だが、これで準備は整った。この後は賭でしかないが、俺は自然と笑みを浮かべていた。さあ君の出番だ、岩陰から覗く大斧使いの少女さん……

彼を見かけたのは偶然だった。汝南から徐州へと向かう途中、盗賊に絡まれているのを見かけたただけだ。多勢に無勢、助けに入ろうと思ったけど、それよりも早く二振りの槍をもって盗賊を打ち倒していた。

私はそれに見惚れてしまった。なぜかは分らない。別に舞うような華麗さが有るわけでも、周囲を圧倒する迫力が有るわけでもなかった。実力で言えばおそらく私よりも弱いだろ。それでも見惚れてしまったのだ。敢えて言うのなら芯。大樹みたいな見ていてるだけで安心感を得られるような、そんな感じだった。

彼はそんな私を見つけると、小さく微笑んですぐに馬を駆ってさっさと行ってしまった。向かったのは徐州の方角。私は迷いもせず追いかけた。

それから一日、付かず離れずの位置を保ちながら私は彼と同じ方角に向かっていた。彼は私に気づいた素振りも見せずに、ただ黙々と馬を進ませている。やけに盗賊に絡まれていたけど、それでも焦らずに。

だけど、そんな彼も百近い盗賊に囲まれてさすがになす術が無いように見えた。私は隠れていた岩場からいつでも助けに出られるように身構えていた、そんな時だった。

「我が名は李通、字は文達！ 汝南が朗陵の県令なり！ 命が惜しい者はさっさと去ね！」

彼の名乗りが聞こえたのは。李通文達……この名前に聞き覚えがあった。朗陵の街を賊から解放し、民から県令を要請された義勇軍の総大将。驚いて、思わず彼の方を見ると彼は私を見て微笑んでいた。いや、あれは何か悪巧みを思いついた顔の方が近いかもしれない。後をつけていた事が気づかれていたという事実に関頭に頭が回る前に、男達の状況を見て彼の思惑が分かってしまった。

彼の眼は語っていた、「奇襲しろ」と……

それは盗賊達にとっては突然の事だった。突如現れた少女に包囲の一角を破られた。想定等まったくしていなかった奇襲に、盗賊達は狼狽えた。もちろんそれを見逃す筈もなく、馬から飛び降り一人の男の懷に潜り込む。男は驚きながらもとつさに剣を振り下ろしたが、時既に遅し。鳩尾に石突を叩きこまれ、くぐもった声と共に崩れ落ちる。更に、それと同時に俺の馬が駆け出した。止めようとする盗賊共などものともせず——白燕という名の表す通り——空を舞う鳥のような速さで囲みを抜け出した。

少女による奇襲と白燕による陽動に、盗賊達の意識は分断された。少女の方に向かう者、白燕を追う者、俺と相対する者。しかしその心中はかなり揺れている事だろう。そこに追い討ちをかけるように盗賊達の悲鳴。どうやらあの少女は俺の予測以上に強かったらしい。

ならば、今俺のやる事は一つだな。

「さあどうする？　まだやるか？　やるというのなら朗陵三千を相手すると思え！」

その一言が止めとなった。一人、また一人と踵を返して逃げ出した。そうなつてしまえば後は早かった。皆、悲鳴を上げながら我先にと逃げ出した。頭領らしき男が大声で怒鳴りつけているが、効果は無く残ったのは数人だけだった。

「まだやりますか？　もうあなた達に勝ち目はありませんよ？」

いつの間にか隣に来ていた少女が静かに告げた。まだ向こうの方が人数が多いが、これくらいなら二人でどうにでもなる。少女もそれを分かつていたからこそ、出た言葉だろう。

「く、くそ、退くぞ！　お前等覚えとけよ！」

流石に状況不利を悟ったのか残った男達も、とうとう逃げ出した。もちろん、捨て台詞も忘れずに……しかしまあ……

「テンプレだな……」

「何か言いました？」

つと、どうやら声に出してしまったようだ。

「いや、なんでもない。それより助かったよ。さっき聞こえたと思うが、俺は李通、字は文達。一応、朗陵で県令をやってる。良かったら名前を教えてもらえないか？」

「え、ちよつと、そんなお礼を言われる程じゃないですから……頭

を上げて下さい」

拱手して頭を下げる俺に、少女は慌てて顔を上げるように言う。しかしなあ、極々小規模とはいえ戦いに巻き込んだ上に、助けて貰ったのだからこれ位は当然だと思っただが。それに何をするにも礼を逸してはならぬが母の口癖だったし。

「いい加減に顔をあげてください！」

尚も頭を下げる俺に、とうとう少女の方が痺れを切らしたようだ。俺の肩を両手で掴み強引に顔を上げさせた。ただ、力が強すぎて首が少々痛かったのは内緒だけど。

顔を上げた、というか上げさせられた俺を見て少女は満面の笑みを浮かべた。そんなにお礼を言われるのが嫌だったのか？ 疑問顔の俺をそのまま放置して、少女は口を開いた。

「私は徐公明といいます。姓名が徐晃で字が公明。今は気ままな旅人……って所ですかね」

徐公明……魏の五大将に数えられる名将。慎重さと大胆さを併せ持ち、戦場で負ける事は無かったと言われる不敗の將軍。

今、俺の目の前に居るのは無造作に纏めた長い黒髪が特徴的な少女。しかし右手に持つ大斧と少女が纏う雰囲気彼女が歴戦の武人だと雄弁に語っていた。俺は既に確信していた、彼女は間違いなく徐公明なのだ。

徐晃が女性という事実はもう、俺にとってはどうでもいい事だった。というか慣れたという方が正しいか。李佳や杏もそうだが、江東の

虎とか、小霸王とか、美周郎とか、臥竜鳳雛とか、老將軍とか、涼州の錦とかとか……昔の旅を思い出すだけで心当たりは山程あるのだ。

昔を思い出し、もう少し同性の將軍が居てくれてもいいもんだがな……とか思つてると公明さん（ちゃんか？）に怪訝そうな顔で見つめられていた。どうやら黙り込んだ俺にどう対処していいのかわからなかったのだらう。

慌てて謝ろうとした時、「くう」と、可愛い腹の虫の鳴き声が聞こえた。もちろん、俺が発した音ではない。俺は二日くらいなら飯を抜いても平気だし、何よりそんなに可愛い鳴き声じゃない。となると、必然的にもう一人になるわけで……俺の目の前には既に顔を真っ赤にした、徐公明がいたりする。

「と、とりあえず、街に向かおうか」

そう言う俺に徐公明はこくりと頷くと、無言で自分の馬に跨りさつさと街を目指していった。

近くの街に着くまでの一刻の間、会話も何も無かった事と、終始徐公明の顔が赤かった事を一応記録しておく。

汝南編第参話 徐州への道中 其二（前書き）

遅くなり申し訳ありません

汝南編第參話 徐州への道中 其二

「さつきはどうもすいませんでした」

近くの街に着き、食堂の中でやっと一息ついた時、いきなり公明に謝られた。未だに顔は赤いままだが、どうやら幾分と気持ちは落ち着いたようだ。謝っているのはこの街に着くまでの態度の事だろう、多分。というか他に思い当たるものがない。そんな事ほとんど気にしてない俺は、極めて軽く手を顔の前で振った。それより今は目の前の料理の方が気になってしょうがない。

「あゝあゝ、そんな事気にしてないから、とりあえず食べな。俺のおごりだから遠慮しないで好きなだけ頼んでいいから」

そう言つて俺は目の前の小籠包を口に入れる。うん、肉汁たっぷりで旨い。そのまま箸を春巻きに伸ばす。そして箸は次々と料理を口に運んでいく。

料理にがつく俺と、未だに手をつけない公明。遠慮しているのか、はしたないとでも思っているのか。しかし、そんな俺と目の前の拉麵を見比べて、とうとう我慢出来なくなったのか麵を嚙り始めた。

公明は「美味しい……」と一言呟くと箸は止まらなくなった。それに俺も加わりすごい速さで卓いっぱい料理は消えていった。だって本当に美味かったんだよ、ここの料理。

「さてと、一つ質問していいかな？」

食事を終え、お茶で一息ついた所で気になっていた事を聞く事にした。俺の気配が変わったのか、公明は満足そうな顔から一転、真面目な表情で俺を見つめ返してきた。二人の間に緊迫した空気が張り詰めた気がした。

「なんで、俺についてきた？ 興味惹く事なんて無いと思うんだが」俺には彼女が何故ついて来たのが全くわからなかった。別に見目が良い訳では無いし、まあ、そんな事で彼女がついて来るとは思わないけど。他にも色々と考えてみたのだが、納得いく答えは出なかった。

そんな俺に対し、公明はまっすぐに俺の目を見つめ、おもむろに口を開いた。

「李文達殿、私と一手御手合わせ願いたい」

「……………はあ？」

……………何言っただ、この娘は。俺の疑問に対しての答えが手合わせを申し込む事だと？

「訳がわからない」

そう言おうとして彼女の眼を見るが、彼女の視線の鋭さが俺の口を閉ざさせた。先程までの顔を赤くしたり、美味しそうに料理を頬張っていた少女の顔はなく、武人の表情の徐晃が目の前にいた。ただ、どこか陰を感じるののは気のせいだろうか？

彼女の表情を見て違和感を感じながらも、俺には断る事は出来なか

ったのである。

あれから半刻程後、私と彼は街外れの草原にいた。

失礼極まりない私の願いを聞いた彼は、しばらく私の顔……いや目を見詰めた後、深いため息と共に手合わせを了承してくれた。

まさか何も聞かずに了承してくれるとは思わなかったので、思わず聞き返してしまったのだが……

「目は口ほどに物を言うつてね。それに、俺も一応武人だからね……はあ、まったく祭さんのせいだよな……」

と、苦笑いしながら答えてくれました。その後小さく誰かの愚痴を呟いていましたが……ともあれ、彼と手合わせする事になったのだけ……

（隙がない……）

いや、隙がない訳ではない。小さな隙ならば一つや二つはある……あるのだが何故か斬りかかるのが躊躇われた。理由などない、言うならば武人としての勘だろうか。

「どうした？ 手合わせをするんじゃないかったのか？」

文達さんは腰を落とし低く槍を構えたまま微動だにせず、挑発するように言った。思わず仕掛けそうになるが必死に堪える。駄目だ、挑発に乗っては相手の思う壺だ。先程の戦いを思い出す。挑発、陽動、奇襲、一喝……あの圧倒的不利な状況で相手を手玉に取るように戦った文達さんだ。相手の思うままに動くのは危険すぎる。

（考える……良く考える）

私の武才が彼に劣っているとは思わない。事実、速、力、技全てにおいて勝っているだろう。ただ経験……その一点においては自分のほうが劣っているだろうとも思う。

いくら武に自信があっても私は邑から出て一年に満たない小娘に過ぎない。県令の彼にそれ以下の経験などあるはずがっ！？

「どうした、考え事か？」

そんな事を考えていると、文達さんの声と共に槍が私に向かって伸びた。狙いは右肩、それを大斧の柄で下から弾いて一歩だけ後退し追撃に備える。しかし、追撃が来る事はなかった。代わりに来たのは……

「無駄な考え休むに似たりつてな。ほら、さっさとかかってきな」

文達さんの嘲笑混じりの挑発だった。瞬間的に頭が沸騰する。流石にそれはひどいのではないか！　という意志を込めて文達さんを睨みつけた。

そして、気付いた。文達さんは挑発したのではないという事を。

目は口ほどに物を言う。先程文達さんが言った言葉。その意味を噛み締め、無防備になるのも構わずに深呼吸。これでよし。改めて文達さんに向かいあう。そこには満足そうな顔をした文達さんがいた。そうだ、これはあくまでも手合わせだ。ならばあれこれ考えるよりも自分の持てる物を全て見せよう。それが私の申し出を受けてくれた文達さんに出来る事だ。

「失礼しました、そしてありがとうございます」

小さく、文達さんに聞こえない程で謝り、そしてお礼を呟く。出会ったばかりの私をちゃんと見てくれて。もう迷いはしない。だからこそ見せよう、私の最高の一撃を。

「行きますよ文達さん。これが私の本気です」

一刀との手合わせ&登場予定オリキャラ（前書き）

かなり先の話になりますが、前に思い付いて書いてあった物を手直しして載せておきます

（主人公の名前が違うのは誤字ではありません、偽名です。モデルは京劇に出てくる北宋から南宋にかけての武人です）

改訂終了までもう少しお待ち下さいm（　　）m

後書きにて、登場予定のオリキャラの名前を乗せておきます

趙儼、杜襲程のマイナー武将は出ませんのでご安心下さいm（　　）m

一刀との手合わせ&登場予定オリキャラ

風、真桜、沙和との手合わせで実力の確認も済み、今日の一番の目的である一刀との番になった。

「文龍さん大丈夫ですか？ 少し位休んだほうが……」

一刀が心配そうに声をかけてきた。まあ、四連戦だから解らなくもないが、俺としては「良い運動になったな」程度のもんだから別に大丈夫なんだけどな。

「心配してくれてありがとな、それより武器はどうすんだ？ 模造刀で良いか？」

確か一刀は剣道部だったって言ってたし、刀があればいいんだが、もちろん日本刀みたいなものはないしな。しかし、そんな心配は無用だったようだ。

「あ、俺は木刀あるから大丈夫です」

聞けば、夏候惇と何回も修練と称して手合わせしたらしく、その時に作ってもらったらしい。……まあ、一度も勝てなかったらしいけど。しかし、木刀か……だったら槍だと可哀想だよな。

ならばと腰紐から剣を鞘ごと引き抜く。ついでに鞘から抜けないように、紐で固定する。試しに思い切り引っ張ってみたが抜けない。これなら余程の事が無い限り大丈夫だろう。

「ん、これでいいか。悪い、待たせたな」

「いえ、俺もその間に準備出来ましたし」

どうやら一刀は無駄に待っている事はなかったようだ。すっかり身体を解し終えてるようだ。

二人共準備を終え、さあ、やろうか！　という時に、横から真桜の声がかかった。

「その前に文龍はん、細剣で戦えるんかいな？　隊長もなんか細長い棒切れやし」

どうやら俺達の武器を見て、不安に思っただけらしい。確かにこの時代の剣に比べて、俺の剣も一刀の木刀も細い。この時代の武器はそこまで切れ味が良くないため、技で断ち斬りより力で叩き斬るほうが多い。その分、大きく重い武器も増えるのである。

沙和の武器【二天】も俺達の物よりは太かったしな。

「これは俺の世界での武器を模した物だよ。斬る事に特化した武器なんだけど……うゝん、実物を見せられないのが痛いな」

「そりゃまあ、さすがに本来の得物じゃないから完全じゃないけどさ。槍もそうだし、なんとかなるよ」

俺と一刀は揃って反論した。真桜と沙和は一刀の言葉に興味を引いていたが、風が何故か怖い顔で俺の両肩を掴んだ。

ていうか、痛いって、本気で痛いから、力任せに掴まないで！

「ちょっと、風！ 何やつとんねん！」

「風ちゃん、顔怖いの〜」

真桜と沙和が止めに入ってくれたが、風は気にも止めない。一刀は訳が分からないのか、啞然としている。

うん、俺も訳が分からないから、とりあえず止めてくれるか？ そろそろ肩が砕けそうだ。

「そんな……本来の武器を使ってないのに……一当てもさせてもらえないなんて……」

……もしかしてまずった？ いや、確かに本来の武器使ってないけど……いや、軽く使ってるけどさ。あゝ、なんて説明すればいいんだよ！ しかも一刀の前じゃないか！ それだけはまずい、それだけは。

そんな良い感じで混乱し始めた俺をよそに、真桜、沙和、一刀がなんとか風を引き離してくれた。しかしいまだに怒り（？）が収まらないのか、身体がふるふると震えていた。なんとか混乱も落ち着き、とりあえず謝ろうとして……

「お願いします、私を鍛えて下さい！」

風の土下座に遮られたのであった。

一刀との手合わせ&登場予定オリキャラ（後書き）

登場予定オリキャラ

趙儼（李佳）、杜襲（杏）、徐晃、魯肅、劉曄、呂範、劉辟、徐庶、
楊阜、陳羣、賈逵、滿寵

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3084h/>

転生【恋姫†無双】演義

2011年1月28日21時23分発行